

「今」は歴史の最中

—歴史を繋ぐというまちづくり—



新潟地域会
伊藤純一

古い建物の保存活用に関する活動に約20年関わってきました。現在も事務局として活動を続ける「新潟まち遺産の会」は新潟市が歴史を感じられるまちにしたい、と古い建物を通じてまちづくりにコミットする市民団体です。

新潟市中心部はかつて湊町として栄えたことからか商人気質のまちとして、古いものより新しいものに目を向ける傾向があります。300年以上も前の町建てで生まれた町割にはかつて堀が巡らされており、まちそのものが湊でした。しかし戦後の経済復興期、また新潟地震後の復興需要により、当時水質も劣悪化していた堀を埋立て道路拡張する事業が、当たり前のごとく行われました。当時の市民の中に堀の保存を願った人はどれだけいたことでしょうか。もし今当時のまま堀が残っていたら、新潟は世界にも誇れる魅力ある水の都になっていたと思います。現在堀を復活させようとする活動もありますが、現実的には一度失ったものを取り戻すことがどれだけ容易なことではないか、多くの市民は悔恨の思いを抱いています。

上質で貴重な歴史的建造物に消失の危機が囁かれると、その建物の価値や魅力が伝わるシンポジウムや見学会などを市民向けに企画し、多くの人に保存活用の意義を問いかけました。功を奏し保存活用が叶う建物もありましたが、消失を免れなかった建物も少なくありません。危機が表面化してから運動するのでは間に合わないことを痛感し、歴史的建物がまちのなかでどれだけ価値を持っているのか広く市民に知ってもらう活動、対処療法ではなく予防療法が重要と思い、現在はそちらに力を注いでいます。

建物の話ではないですが、祭礼行事に長く関わっています。生まれ育ったまちの氏神社には神事である祭礼が200年ほど続いています。子どもの頃から接し今でも保存会に名を連ね関わっています。祭礼、祭り行事は何気なく何百年と継承しているわけではありません。口伝体伝で伝承する祭り行事は、決して大きな変革を求めず、むしろ地域でブラッシュアップして次世代へ繋ぐことを皆心掛けています。200年続いてきた歴史には100年目

150年目といった過去の「今」という通過点があり、またこの先300年目400年目の歴史から見ると今の200年目は中間点と言えます。「今」は歴史の最中、つまり歴史とは今を繋ぐことの結果なされてきたことなのです。

まちも同じことのように思います。町並みやまちの営みは歴史を繋ぐこと、今を継承することで層の厚い魅力あるものになります。今あるまちを今までの歴史を理解し継承し次の世代に引き継ぐ、それが現代のまちづくりだと考えています。安易にスクラップアンドビルドせず、引き継ぐべき価値や魅力を伝え一步一步引き継いでいくことで良好な継承が生まれるのではないのでしょうか。

祭礼祭り行事がうまく継承されている私が生まれ育ったまちは、縄文時代にできた砂丘上に地形なりに道ができた迷路のようなまちです。戦後まもなくまで機業で隆盛を極めた当地には、豊かだった時代の象徴として土蔵など歴史を感じさせる建物がまだたくさん残っています。この建物、景観、歴史を良い形で継承したい。世代交代や時代の変化で一気に町が変貌していくことを今までの活動の中でたくさん見てきました。私自身がこの価値ある土蔵や蔵を活用することで魅力を伝え、まちの歴史継承を促したい。そんな思いから昨年末、まちの景観に寄与する置屋根真壁蔵を借り受け事務所に移転しました。

歴史を継承することは今あるものの価値や魅力を見だし次世代に引き継ぐこと。「今」は長い歴史の通過点で、でき上がる歴史がどんなものになっているかはわかり得ません。それは次世代その先の世代が繋ぎ続ける結果なので。私たちの役割は次世代に良好に繋ぐこと、そのた

めにも今、価値ある古い建物やまちの魅力を伝える活動が重要なのだと考えています。



景観に寄与している置屋根真壁蔵を活用し自らの事務所とした